

Timonen, V., Foley, G. and Conlon, C., 2018, "Challenges When Using Grounded Theory: A Pragmatic Introduction to Doing GT Research," *International Journal of Qualitative Methods*, 17: 1-10.

ティモネンほか, 2018, 「グラウンデッド・セオリーの使用における課題：GT の研究を実行するための実用的な導入」

レジュメ作成者による紹介

社会政策の研究者がグラウンデッド・セオリーを方法論的に考察した論文。グラウンデッド・セオリーの研究をいかに実用的な（pragmatic）やり方で行うかという視点から、グラウンデッド・セオリーにまつわる「神話」と、グラウンデッド・セオリーを名乗る研究が固守せねばならない中核的原理とを示している。

1 導入

- グラウンデッド・セオリー（以下 GT）は広く用いられている研究方法であり、さまざまな書籍で詳しく解説されている。
 - GT の方法にはいくつかの異なる形式があるが、それらは部分的に矛盾しており、互いに論争しているように見える。
 - この論文では、GT のすべての型が共通してもつ要素を明確にすることを目指す。
- GT には多くのメリットと信奉者があるにもかかわらず、しばしば難解で時間がかかりすぎるとみなされており、混乱や不安をもたらすと同時に迂闊な信奉者を引きつけてしまっている。
 - 学生だけでなく、経験を積んだ研究者でさえ、自分が GT を正しく適用できているのか、GT を十分活用できているのかと頻繁に悩んでいる。
 - さらに、著者たちは、GT の中核的な原理をほとんど守っていないにもかかわらず、GT の方法を適用したと主張する論文の査読や学生の研究をしばしば目にする。
- この論文では、GT の中核的原理を詳しく説明する。
 - 既存の GT の型にとって代わるものを提唱しようとするのではなく、この方法に初めてふれる人や混乱している人のために、既存の方法を再説することを試みる。
 - 著者たちは、GT を実行することに焦点を当てた GT の方法の統合を目指す。著者たちの解釈によれば、実証主義や構築主義など、どのような見方からであっても、GT は実用的なやり方で実行できる。

2 背景：GT の異なる系譜

2-1 古典的なグラウンデッド・セオリー

- GT の「創始者」である Glaser と Strauss（1967/2010）¹は、第二次世界大戦後の社会科学者たちが、検証に過度に重きをおき、理論化を軽視するようになったことへの反発に動機づけられていた。
 - 彼らは、予測と応用の重要性を強調し、すぐれた理論は将来起こる事象を予測するように機能すべきだと考えていた。
- 存在論的に、Glaser と Strauss による古典的な GT は、客観主義に最も強く支えられ、実証主義のアプローチに最も近い。
- 方法論的な助言については、後続の型と比べると少ししか記されていない。
- 1 人の研究者や少人数のチームが、データを記録することよりも理論を構築することへの意欲に突き動かされ、すばやく作業することに重きをおく。これは、今日の多くの制度的要請や慣行とは相反するよう見える。

2-2 Strauss と Corbin：客観主義と再帰性

- 古典的アプローチとは対照的に、Strauss と Corbin（1990/2015）²は、継続的な検証および帰納と演繹の組み合わせに重きをおいたデータ分析のあらましを詳細に示した。
 - これは、GT の方法に段階的な「公式」があり、「すぐれた」GT を生み出すためにはこれに徹底して従わなければならないという印象を生み出すことに寄与した。
- この型は、研究者によって発見される客観的で外在的な現実があると理解する客観主義的な前提にたつ。
 - ただし、Corbin による上記の著作の新しい版では、研究者の再帰的な役割により重きが置かれ、古い版で描かれた技術的な手続きを適用する側面が弱められた。

2-3 構築主義的グラウンデッド・セオリー

- 知識の生成プロセスにおける調査協力者と研究者の役割や、そこで生成された知識の性質を問うことが、Charmaz による構築主義的 GT の重要な出発点³。
- 構築主義的 GT は、研究者がデータと理論の生成に関与していることを明確に示した。

¹ Glaser, B. and Strauss, A., 2010, *The Discovery of Grounded Theory: Strategies for Qualitative Research*, London, England: Aldine Transaction (fifth paperback printing). (Original work published 1967).

² Strauss, A., & Corbin, J., 2015, *Basics of Qualitative Research: Grounded Theory Procedures and Techniques*, Newbury Park, CA: Sage. (Original work published 1990).

³ Charmaz, K., 2014, *Constructing grounded theory, 2nd ed.*, London, England: Sage など。

- 調査協力者は、知識の構築に積極的に関与しており、知識はその構築プロセスが認識されたときにより強固なものになるとされた。
- 生成された知識は、解釈による描写の構成要素とみなされ、それゆえに本質的には主観的であることが強調される。しかしこれは、今日の研究プロジェクトにますます課されるようになっているいくつかの要請（たとえば大規模な政策対応を下支えする客観的な研究成果を産出することの要請）とは緊張関係にあるかもしれない。

2-4 状況分析

- Clarke の状況分析は、ポストモダン的な転回において GT を「再生」するもの⁴。
- 状況分析の基本的前提は、状況の条件は状況の中にあり、したがってプロセスと同時に文脈についても研究の対象にすべきというもの。
 - 条件がたんに状況を規定するのではなく、それ自体が状況の一部であることを意味し、状況の分析においてはその条件を表す要素を特定することが要請される。
- 3つの状況マップが提案される。
 - 主要な人間、人間以外のモノ、言説その他といった状況の要素を含んだマップ（＝状況マップ）。
 - 状況の中のアクターを含む文脈を描いたマップ（＝社会的世界／アリーナマップ）。
 - 状況の中でとられた、またはとられていない立場性を描くマップ（＝位置マップ）。
- 通常、政策とのレリヴァンスという概念は、社会問題への一般的な適用可能性を意味する。この方法で得られる知見の一般化可能性は限定的であることから、応用的な政策研究にこの方法を用いることはチャレンジングなものとなる。

2-5 批判的グラウンデッド・セオリー

- 最近では、批判的实在論の見方を GT の方法と結びつける展開が見られる。
 - 批判的实在論の見方では、人々の解釈によって形成される、流動的で開かれた単一の現実が存在するとみなす。
- 批判的实在論の主要な特徴はリトロダクションという推論形式で、既存の理論や知識を経由することで、記述から因果的推論へと移行しようとする。

⁴ Clarke, A. E., 2005, *Situational analysis: Grounded theory after the postmodern turn*, Thousand Oaks, CA: Sage など。

- 「批判的グラウンデッド・セオリー」とは、批判的実在論によって下支えされた理論を操作化するための GT の方法である。
 - 古典的な GT とは対照的に、批判的 GT の方法では、研究に先立つ批判的な観察などから出発し、変化を起こそうとする。批判的 GT のフィールドワークは、つねに解放を目指したものとなる。
 - 一方、他の GT の型と同じく、理論は新しいデータによって発展・修正される。

2-6 共通の基盤に向けて

- これらすべてのアプローチは、プラグマティズムの哲学的伝統に影響を受けている点で共通している。
 - いずれも、プロセスや相互作用、文脈に関係する問題を問うており、新たな知見に開かれた研究を目指している。
- しかし、現代の研究者の大部分は、自身の研究が社会的・政治的・経済的問題に応用できることを説明する必要があるといった実用的な懸念と切り離せないような知識生産のプロセスに従事している。
 - したがってほとんどの研究者は、主要な社会問題とのレリヴァンスを証明すべしといった、研究助成機関からのさまざまな要求に回答しなければならない。
 - 著者たちは、ここで示す GT の中核的原理のあらましが、そうした数々の要求にどのように答えるかを研究者たちが考える際の一助になると考えている。

3 GT にまつわる神話

3-1 神話 1：GT は十分に練り上げられた理論を産出せねばならない

- グラウンデッド・セオリーという名前からは、その研究から本格的な（fully fledged）理論が生まれなければならないということが示唆される。
- しかし、実際の GT の研究における最もよくある成果は概念の明確化であり、それは、何かを完全に説明・予測することを目的とした包括的なアイディアの体系という意味での理論とは異なっている。
 - この点は、いくつかの GT の手引きでも明確に認識されている。たとえば Bryant (2017)⁵は、グラウンデッド・セオリーの方法は当然ながらグラウンデッド・セオリーの開発につながるが、この「グラウンデッド・セオリー」はモデルや枠組み、概念図式などとも呼ばれるとしている。
 - Bryant の指摘で重要なのは、GT の方法は理論をもたらしことができるが、多くの場合それは、新しい、もしくはよりよい概念化であったり、概念を結びつける枠組

⁵ Bryant, A., 2017, *Grounded Theory and Grounded Theorizing: Pragmatism in Research Practice*, New York, NY: Oxford University Press.

みであったりするのであり、あるプロセスや事象のすべての側面、段階、帰結などを扱うような完全に練り上げられた理論には至らないということ。

- 著者たちの考えでは、GT の方法はつねに理論をもたさなければならないという主張は、不正確かつミスリーディングであり、（とくに初学者にとっては）不必要な威圧となっている。
 - すべての GT の研究は理論構築（theory-building）の野心をもって始められるべきだが、研究者たちは、研究上のさまざまな実情がそうした理論を生み出す試みを妨げることを心に留めるべきであるとされる。

3-2 神話 2：先行研究や既存の理論にふれることは GT をダメにする

- 研究者は「空白の石板」とあるという誤った考えが、GT に対する混乱や疑念を生み出している。
 - 古典的な GT の論者は、データ収集の前に先行研究にふれないよう忠告する。
 - しかし現在では、奨学金や助成金の申請、倫理手続きその他の「通過儀礼」において、文献レビューを作成して研究分野の「最先端」を説明することは標準的な要件になっている。
- 著者たちは、研究者が（先行研究から得られた）ある理論的な指向性をもって研究する場合でも、仮説の検証までは至らないが、GT の方法を用いることができると主張する。さらにいえば、GT は、既存の理論的洞察をより深めるために使用できると考える。
 - GT の前提は、研究するなかで遭遇する世界の描写に対してオープンであることであり、データを理論的に説明することを強制しないことである。これは、既存の理論に目配りをすることによって可能となる。

3-3 神話 3：データ収集と分析はつねに並行して行わねばならない

- データ収集と分析が相前後して進行するのが、GT の理想である。しかし、この理想はつねに実践可能であるわけではない。
 - とくに、インタビューが主なデータ収集の方法で、時間が制限されている場合。実際に、しばしば GT の研究者がインタビューデータの収集と分析の同時進行と呼ぶものは、サンプルサイズや研究の射程、トピックなどによってかなり異なる。
 - さまざまな要因が、時機にかなった調査協力者の募集やそれに続く分析のタイミングに悪影響を及ぼしうる。
 - 例：データ収集の機会があれば、分析のための十分な時間があるかどうかにかかわらず、フィールドワークを進めなければならないような場合など。
- データの生成が理想的な順序に忠実でない場合でも、理論構築がデータに根拠づけられている研究プロセスは、GT の方法の要件を満たしているといえる。

3-4 神話4：GTのやり方でのコーディングは過度に時間がかかる

- GTのさまざまな派閥な異なるコーディングの手続きを発展させてきた。
- 著者たちは、すべてのコーディング手続きは、①コードやカテゴリーを特定するためにデータをできるかぎり「開示」し、②カテゴリー間を結びつけて概念枠組み／理論を発展させるという目標を共有していると主張する。
 - これら分析のステップは、しばしば「絶えざる比較」という用語で要約される。
- GTにおけるコーディングのあらゆる段階は時間を必要とし、すべてのデータに注意を向けることが重要とされる。しかし、GTのコーディングは骨が折れると評され、研究者を「より簡単」そうな代替手段に向かわせる要因となっている。
 - この理由の1つは、どれだけデータセットが膨大でも、すべてのデータに初期のコード（オープン・コード）を付さなければならないと信じる者がいる点にある。
- しかし、GTの伝統では、初期のコーディングはトピックをこじ開ける（break open）ために実用的に使うことが支持されており、その後に理論的サンプリングを戦略的に使用して、データセット内の別のところに同じコードを見つけ出すことが可能である。
 - 換言すれば、研究が進むにつれて、サンプリングを介して追加のデータが集まることから、すべてのデータに初期のコードを付けることは必要でない。

4 GTの研究の中核原理

- 以下で述べるのは、存在論的・認識論的立場にかかわらず、GTを名乗るあらゆる研究が固守しなければならないと著者たちが考える原理や手続きである。

4-1 中核原理1：“grounded”という語を真剣に受け止める

- GTの研究はいずれも、新しい予期しない知見に対してオープンでなければならず、「仮説検証」のスタイルを避けなければならない。
 - GTは、すでにある命題を確証／反証することには適していない。仮説検証に関心をもつ研究者は、他の方法を用いるべきである。
 - 先述のように、現在のアカデミアでは、フィールドに入るのに先立って文献レビューを行うことが実的に必要とされる。GTの研究者は、得られたデータをアプリオリなカテゴリーに押し込めてしまわないよう、先行研究についての知識を背後に留めておく能力が必要である。
 - データに対してオープンであることには、データ収集の際に得られた観察や洞察によってリサーチクエスチョンを変更する備えがあることや、特定のタイプの回答をほめかして調査の幅を狭めるような「クローズド」な質問を避けること（例：「学校が好きですか」よりも「学校について教えてください」という質問のほうが望ましい）も含まれる。

- コードやカテゴリーは、既存の概念や知識との「対話」が可能であり、そうしなければならないが、あくまでもデータに基づいたものでなければならない。
 - 「対話」は、はじめに文献レビューを作成するという制度的要請の一部として行われ、その後はデータから立ち現れた概念やカテゴリーを議論するために行われる。
 - GT のアプローチはつねに帰納的であるべきだが、同時に演繹やアブダクションも含んでいる。研究者は、理論を構築するプロセス（少なくともその野望）においては、データに基づいた概念が既存の知識とどのように関連するのかを理解するよう努めなければならない。

4-2 中核原理 2：文脈と結びついたプロセスや現象を描写・説明する

- GT で最もよく使われるデータ収集法は質的インタビューだが、フォーカス・グループや（参与）観察、映画・新聞・伝記といったヴィジュアル資料・テキスト資料など、他のさまざまな手法が利用できる。
- これらのデータは他の方法論でも用いられるが、GT における使用法を特徴づけるものとして、データが生成された文脈と関連する、データから立ち現れるプロセスや出来事や事象を指向する点がある。
 - GT におけるデータの生成は、プロセスや事象を特定し説明できるようなやり方でデータを表現することにより、文脈の違いに応じて行為や相互行為がどのように変化するか説明することを目的とする。
- データ生成を通じてプロセス、出来事、事象を描写・説明しようとする試みは、研究者たちが進行中の行為や相互行為の複雑さに順応していくことを要求する。
 - たとえば、GT のインタビューは、通常は構造化されずに開始されるが、実際のところ GT のほとんどインタビューはある程度の構造を含むものになる。その理由は、研究者がデータから現れた概念を精緻化することに目を向けるようになるにつれて、質問がより焦点化され、データにおける重要なプロセスをとりまく複雑さを理解することが目指されるから。
 - 換言すれば、研究者はだんだんと、「ここで何が起きているのか」、「主要なパターンは何か」、「何がそれを説明するか」といった点に関心を向けるようになる。

4-3 中核原理 3：データにふれながら理論を追求する

- GT におけるいかなる議論や理論化も、究極的にはデータに立ちかえり、正当化されなければならない。
 - このことが、メモ書き（memoing）や「絶えざる比較」といった、GT の分析を高度に反復的なプロセスにする慣行を必要とする。

- 「絶えざる比較」は、複数のデータの断片間の類似性や差異を特定するために、データ同士を比較する分析プロセス。
 - ここで重要なのは、研究者は絶えず「このデータはこの研究との関連で何をしているのか」を問うというコーディングにおける前提である。
 - 概念や概念枠組み、理論を追求するにあたって、調査、データ収集、データ分析の行き来を反復することは、すべての GT の方法で共有される中核原理である。
- コーディング関連の術語は、GT の派閥の間で異なる⁶。しかし、GT のすべてのコーディング手続きは、概念とカテゴリーをもたらすという共通のプロセスを共有する。
 - このことが、理論を追求するためのサンプリングを行わせる（後述）。
- メモ書きは、GT において必要不可欠である。
 - メモとは分析の記録であり、研究者によって採られた分析および方法論のステップ記録したもの。
 - メモは、コーディングとともに、研究者が概念や理論を追求する中でどのようにデータに関与してきたかについての主要な記録である。
 - メモは、カテゴリーや概念がどのように発展し、理論がどこから・どのように現れたのかを説明する際に必要となる。そのため、メモ書きは研究の最初から行われるべきである。

4-4 中核原理 4：理論的サンプリングを通じて理論を追求する

- 上述のように、GT の研究からつねに本格的な理論が生み出されるわけではない。それでもやはり、GT の研究は、研究するプロセスや事象のすべて、もしくはその一部を解明し説明しようと努めなければならない。
 - この目的にとって、理論的サンプリングは絶対的な基準（gold standard）であり、データや分析が本格的な理論に至らない場合でも実行される。
- 理論的サンプリングは、データから現れた概念に基づいてサンプリングをするプロセス。
 - GT の研究は、異質性を含んだサンプリングや目的をもったサンプリングから開始されることが多い。しかし、理論的サンプリングはその目的がカテゴリーや概念の特性やありうる変化を理解することであることから、研究プロジェクトの早い段階から実行できる。
- 研究が進むと、理論的サンプリングはより焦点化され、より小規模な集団や特定のデータソースに向かう傾向がある。ここでの目標は、データの「飽和」を通じて、理論的な構成概念の「飽和」に到達することである。
 - この状態に至ると、新たに重要な洞察がデータから現れてこなくなる。

⁶ 派閥ごとのコーディング手続きの違いについては、社会政策／社会福祉の第 8 回のレジュメも参照。

- 「飽和した」理論とは、進行中のプロセスや相互行為の複雑さをデータが表現できていることを意味する。
- ただし、理論的サンプリングの実施はきわめて難しくなる場合があることを認識することが重要である。
 - より多くのデータを集めることができるかどうか、理論的サンプリングをどれほど実行できるかに影響する（例：ある特徴をもった調査協力者を見つけることが不可能であるような場合）。
 - また、母集団が脆弱性の高い人々であるような場合、倫理委員会やステークホルダーが理論的サンプリングの可能性を制限するかもしれない。
 - 研究者には、特定の時間内に研究を完成させるようプレッシャーがかかっており、このことが包括的な理論構築にかける時間を与えないかもしれない。
- GT においては、追加的な調査協力者や事例を得るためのサンプリングと、分析を組み立て新たな洞察を発展させるための理論的サンプリングを区別することが重要。
 - 理論的サンプリングは、たんにデータセットを拡張するために行われるのではない。むしろ、カテゴリーを説明・描写することや、(理想的には) 主要な概念の関係を完全に説明する理論を生み出すことを目指して行われなければならない。

5 結論

- 本稿は、その基礎にあるプラグマティズムとの関係に基づいて、GT の中核原理を明確にしようとした。
 - 「GT の GT」としては不十分だが、本稿は、GT 自体がその時々学問的展開を背景とした時代の産物であるという考えに基づいている。
- 本稿は、GT をより理解しやすくアクセスしやすいものにしたという動機に基づくが、これは GT を過小評価するものではない。
 - GT は、データ収集や分析における厳密さ、ハードワーク、細心の注意を要求する。
 - すべての GT が本格的な理論を生み出さなければならないわけではないが、基本的には社会的プロセスの説明を目指す点で、GT の研究はきわめて野心的である。